

ロシア思想に現れた日本

坂本 博



「ロシア思想に現れた日本」ということで報告の準備をする過程で、もっと複数のロシア思想家を扱わないといけないと思っていたのですが、だんだん私の専門であるプレハーノフという人のところにテーマが後退してしまいました。今日はプレハーノフのことを話させていただきます。

プレハーノフは先ほど梅田さんの話にも出てきました。彼が片山潜とアムステルダムでのインターナショナル大会で握手をした時、もうすでに日口戦争ははじまっていたのです。戦争たけなわの時期でお互いに敵同士とみなされても仕方がなかったのですが、二人が握手をしたことで、非常にセンセーショナルな事件として受けとめられたことがあります。

このシンポジウムも実は日口戦争100年ということで、去年から話は進められていたのですが、戦争のさなかにお互いに働く者同士は敵ではないのだということで握手をしたこと、このことを100年ということでもう一度振り返ってみなければならぬということがありました。

そもそもフィリモノヴァさんはプレハーノフの資料を保管しているプレハーノフ文書館の館長さんでして、フィリモノヴァさんの方から「反戦ということも含めたことを考えるシンポジウムを開こうじゃないか」という提案があったわけで、それが今日結実したということです。そこで私もプレハーノフのことを話させていただきます。

「プレハーノフの日口戦争論」ということですが、これは非常に単純であるわけです。プレハーノフは社会主義の国際主義ということを考えていました。これはマルクスでもそうですが、プロレタリアートには祖国はないということがあります。働く者同士はいつでも団結して資本家階級と戦わなければならないのだということです。働く者同士で民族の違いを乗り越えなければならないという考えです。ですから、プレハーノフは日口戦争をはじめたのは労働者階級ではなくて、ロシア政府がはじめたのだと考えます。そしてその戦争自体は資本家の利益になるだけであって、労働者はただその重荷を背負うだけである、従って戦争に反対しなければならないということになるのです。しかも他の民族の労働者たちと連携して戦争に反対しなければならないという考えで、単純と言えば単純です。ですが、その当時の歴史をどのように変えていくかという選択肢の1つであったことは確かです。問題は、非常に明確で分かりやすいですが、それはなかなか実現できなかったことです。そういう考えをもう一度振り返ってみようということで、プレハーノフを扱わせていただきます。

プレハーノフはまだ日口戦争がはじまる前から、日口戦争が起こる気配を強く感じていました。これはもちろんプレハーノフではなくても当時の北清事変あたりからそういう問題はかなり緊急な

ものとして現れていたわけです。プレハーノフの書いたものがお手元の資料にありますのでご覧下さい。1904年8月に先ほどの話に出た第2インターナショナル・アムステルダム大会が開かれるのですが、これは2年前くらいからすでに準備がはじまっていました。プレハーノフが1904年の1月に書いた、大会のための演説の草稿で、さっき触れた国際主義の立場が明確に述べられています。特に日本の労働者との連携ということをここで書いています。その例として最初に挙げさせていただきました。プレハーノフは次のように書いています。『パリの行動』というフランスの雑誌がありましたが、それに「掲載された優れた論文で、我々の日本の同志片山は、日本のプロレタリアートを代表してロシアとの戦争に抗議した。この戦争は、彼の言うところによれば、日本の民衆の上にそうでなくても十分重くのしかかっている税の重みを増すことしかもたらさないであろう。私の方からはロシアの同志たちを代表して、国際社会主義の代表者たちの前で、同じく日本との戦争に抗議する」。まだ開戦されていない時に、こういうアピール文を考えています。しかし実際の演説はこの草稿のままではありませんでした。それからまだ7ヶ月くらい時間があって、実際の演説はこれとは違って理論的な面が強まったものになっています。最初の草稿からは、開戦前から非常に危惧し、日本の労働者との国際的な連携を考えていたことが分かります。

そして、いよいよ2月になって戦争がはじまります。この時に緊急に集会が開かれます。プレハーノフはロシアから亡命していました。スイスのジュネーブに住んでいたのですが、彼と同じように政治的な理由で亡命してきた人たちはかなり多かったわけです。ロシア国内では自由な言論活動、政治活動はできないという体制だったわけで、国外でそういう緊急集会が開かれたわけです。そのための草稿「戦争だ！」が書かれています。ここでもやはり国際主義ということが強く出ていますが、こういうことが書かれています。「ブリュッセルの国際ビューロー」、これは第2インターナショナルのビューローです。ビューローは「ロシアと日本の外交関係の中断についてまだ知られていなかった1月7日の会議で、全ての国々の社会主義者たちは自分たちの使える全ての力を振るって、彼らの政府が戦争に参加しないように反対しなければならないと決意した」と書かれています。要するに第2インターナショナルの国際ビューローが決議したことを、集会に集まった人たちは守らなければならないということです。政府がはじめた戦争に対しては、どこの国であれ、労働者階級がそれに反対して戦争をやめさせなければならない、国際主義の立場を貫かななければならないことを訴えていたわけです。

先ほどの梅田先生の話にもこれは出てこなかったのですが、3番目に書いておきました。『イスクラ』というプレハーノフが編集していたロシア社会民主労働党機関紙、『イスクラ』は火花の意で、デカブリストの詩から取られた言葉ですが、社会主義が燃え広がっていくというイメージがあるので。その『イスクラ』紙の4月18日号に、「日本の同志たちの戦争論」というのが載りました。これは『平民新聞』2月28日号の論文の翻訳なのです。『平民新聞』は第一面の一番下の欄は英語で書かれています。ここに「われわれの戦争に対する態度」という英語の論文があります。要するに緒戦の勝利に酔って戦争政策を後押しする民族主義に反対するという社会主義者の立場を打ち出した論文が載っています。これが『イスクラ』に翻訳されて載ったということです。

ついでに言っておきますが、幸徳秋水の「露国社会党に与ふる書」ですが、要するに露国社会党と言ってもいろいろな社会主義党があったわけです。幸徳秋水が言っているのは、ロシア社会民主

労働党というマルクス主義の立場に立った党です。これはプレハーノフの党でもあったのですが、そうであるということを明確に書いています。1884年にはじまった党であって、社会民主党こそが自分が連帯をする党なのだと、当時の幸徳秋水は書いています。しかし彼はその後思想的に先鋭化したというふうに言う人もいます。とにかくそういう交流が実際に行われていたということです。

それからプレハーノフは、次第に日口戦争論を組み立てていきます。つまり誰が戦争をはじめたのかということです。4番目の『社会主義運動』、これもフランスの雑誌だと思いますが、その編集部の方から戦争に対する見解を述べてくれという要請があり、それに応えるという形で手紙を書いています。そこで誰が戦争をはじめたかについても論じるわけです。「ペテルブルグ政府は、どこかの外国列強との衝突が、いくらかでも自らの人気を回復させ、専制体制の魅力にますます有頂天にならなくなった『忠実なロシア臣民たち』の意見における自らの名誉を回復させるだろう、と期待した。資本主義体制においては常に不安定な政治的均衡が、ツァーリズムの冒険的な政策によって、さらに不安定になった。起こるべきことが起こった。戦争がわれわれのところにある」。こういうふうに言っています。ロシア政府が戦争をはじめたのだということです。したがって、「ロシア政府を倒すことなしには戦争を阻止することはできない」という論理になります。彼は長い間、それまで20年以上の長い間、マルクス主義の立場からロシアの専制政府をどのように倒していくかということで運動を続けてきたわけです。戦争の時にはそれを利用して、このように民衆の支持のない政府を倒さなければならない。そういう呼び掛けをするわけです。

5番目はそのすぐ後に書いた論文です。これは『イスクラ』に載った論文ですが、ここではツァーリズムの打倒ということをはっきりと述べています。こういうふうに書かれています。「もしセヴァストポリの壊滅が根底的にニコライ1世の体制を失墜させたとするならば、旅順の失敗はニコライ2世の体制を根底まで揺るがすことを約束している」と、5月1日の段階で言っています。セヴァストポリは、クリミア戦争の主戦場になったところです。ここでロシアはイギリス、フランスに敗北することになるのですが、それが農奴解放という大きな改革に結びついたという経緯があります。それと同じような大きな変革が、日口戦争をきっかけに起こるだろうということです。この時期はまだ旅順は陥落していないのですが、旅順をめぐる海戦で、ロシア軍が旅順港に閉じ込められるという状況になっていますから、それを「旅順の失敗」と言っています。要するに戦争が体制変革に転化するということです。

それから、こういうことも言っています。「われわれには厳しさが必要である」ということです。これを言ったのは、スヴォーリンという自由主義者です。『新時代』という雑誌を出しています。自由主義者ですが、ロシア軍の中の規律の緩みをなくさなければならないというふうなことを書きます。プレハーノフはそういう自由主義者の立場に対しても批判することになります。

次のように言います。「われわれには『厳しさが必要だ』。誰にも何にも役に立たなかったし、立たないであろう『怠惰な』説教のためではなく」、これは自由主義者のことを言っています。「ツァーリズムとの容赦のない戦いのために必要なのである」。

それから同じ論文ですが、これはプレハーノフの1つの考え方で、プレハーノフ一流の考え方といえるのですが、面白いと思ったので引用しました。彼の価値観では、戦争に対する態度は国際社会民主主義という立場から決められなければならないことになります。こういうふうに書いていま

す。「日本の勝利が日本の人民にとってどんなに高くつくかを知っている」。要するに、日本が勝ったら日本の人民、労働者階級はもっと悪い状況になるであろうということを言っています。「だが、それは、ロシアのツァーリの日本に対する勝利が、ロシアにとって、それと同時に全ヨーロッパにとって、比較にならないほど高くつくであろうということも知っている」。要するに、ロシアが勝った場合は、ロシアの人民だけではなくて、ヨーロッパの人民全体が抑圧的な状況下に置かれてしまうということです。したがって「2つの悪のうち、それ（国際的社会民主主義）はより小さいものを選ぶ」。要するに、日本の人民が押さえつけられるというのは小さな悪であるということです。ある意味、功利主義的な考えですが、こうしてロシアの敗北を歓迎する立場をとります。これは非常にプレハーノフらしい考えです。そこにはまったく民族主義的な考えの入り込む余地はありません。しかし今度、第一次世界大戦の時になるとまた事情が変わります。これを喋りはじめると時間をとられるのですが、一言だけ触れておきます。

その後10年して、第一次世界大戦がはじまります。この時プレハーノフは、国際主義という立場を一見変えるような立場をとります。まずロシアを守らなければならないということを言います。なぜそういうふうに変化したのかというのは大きな問題ですが、1つはやはり戦争がロシア社会に与える影響の大きさです。やはり極東での戦争と、ロシアの西側、ロシアの首都であるペテルブルグの近くにドイツ、オーストリア軍が攻め入ってくるというのは非常に脅威であったというのが、1つあります。もう1つは、国際社会民主主義に対する確信が揺らいだこと、第一次世界大戦の場合はドイツ社会民主党が戦時国債を認めたことで、国際主義が裏切られたと考えたことです。つまり、彼が今まで立脚していた根拠そのものがなくなってしまったわけです。それではとりあえずロシアの労働者階級を守らなければならない、ドイツの帝国主義者の侵略、抑圧から守らなければならないということから、「祖国を守れ」という立場になっていく。これは明らかな変化だと思えますが、状況の変化によってかなり立場は変わっていったということです。これも時間がなくなってしまうので、あまり詳しくはやりません。

最後に6番のアムステルダムでの演説です。アムステルダムの大会は8月14日にはじまって20日に終わります。ほぼ1週間に亘ってアムステルダムの音楽堂で開かれました。彼は初日に演説をすることになります。その経過は先ほどの梅田さんの報告の中にありましたので繰り返しません、アメリカの労働組合運動家で社会主義者のデ・レオンという人がいます。デ・レオンは、このアムステルダム大会に参加していたのですが、2年後に『アムステルダム大会のフラッシュ・ライト』という本を著しています。そこにプレハーノフと片山潜の握手の場面も出てきます。

もちろん、『平民新聞』や『社会主義』誌が報じていることに間違いがあるということではありませんが、これらのアムステルダム大会の報告は、基本的には片山潜の報告に基づいているわけです。プレハーノフの側からも握手については少し触れられているのですが、握手をした詳しい状況については書かれていません。ですから横から見ていたデ・レオンの記述は、わりと客観的な記述とすることができるかもしれません。しかも、2年後という記憶がはっきりしている頃に書かれたものなので価値があると思います。

彼の記述によると、大会ではヴァン・コールというオランダの主催者側の人で、大会の議長が、副議長2人を選びます。それがプレハーノフと片山潜であったわけです。プレハーノフはヴァン・

コールの左手に座っていて、右手に議長を挟むような形で片山潜が座ったと書いてあります。ヴァン・コールが最初に開会のあいさつをするわけですが、デ・レオンによると、非常に退屈な演説であったとあります。片山潜の報告では、片山潜とプレハーノフのどちらが最初に手を差し出したのかということは、一切書いていないのです。「握手した」としか書いていません。デ・レオンによると、プレハーノフは退屈な演説の中で、日ロ戦争の話が出るのをずっと待ち構えていて、その話が出た時すぐに議長を間において、片山潜に手を差し伸べたと書いています。ですから握手のイニシアティブはプレハーノフにあったということです。それが握手の場面です。そのあと片山潜が先に演説をして、それからプレハーノフが演説をすることになります。

その時の演説ですが、「日本がこの戦争をはじめたのではなく、それは略奪と搾取と征服に飢えた、力によって自らを異民族の包囲網で取り囲ませたロシアの専制によって開始されたのである」とプレハーノフは言っています。宣戦布告をせずに攻撃をしかけたのは日本だというのが事実なのですが、プレハーノフは一切そういうふうには受けとめていないのです。ロシアの専制が悪いということです。次のようにも語っています。「日本はいまや巨象の片足」、巨象はもちろんロシアのことですが、「巨象の片足をへし折りつつある。日本は抑圧された諸民族に代わって復讐している」であり、ロシア政府は自分自身の民衆の隷属化を自分自身の失敗によって贖っているのだ。要するにロシア専制が諸悪の根源であって、それを倒さなければならないという理論に収束させています。ですが、ロシア専制が敗北するとして、プレハーノフの理論の中から除外された日本の労働者の運命がどうなったのか、すごく考えさせられるところです。

以上が私の報告です。時間がありましたら、フィリモノヴァさんが持ってきて下さった日ロ戦争の記録映画があるのですが、それを7分くらい観ていただきたいと思います。非常にリアルというか、時間を超えて100年前に入っていくようになります。

(さかもと・ひろし 法政大学経済学部講師)